

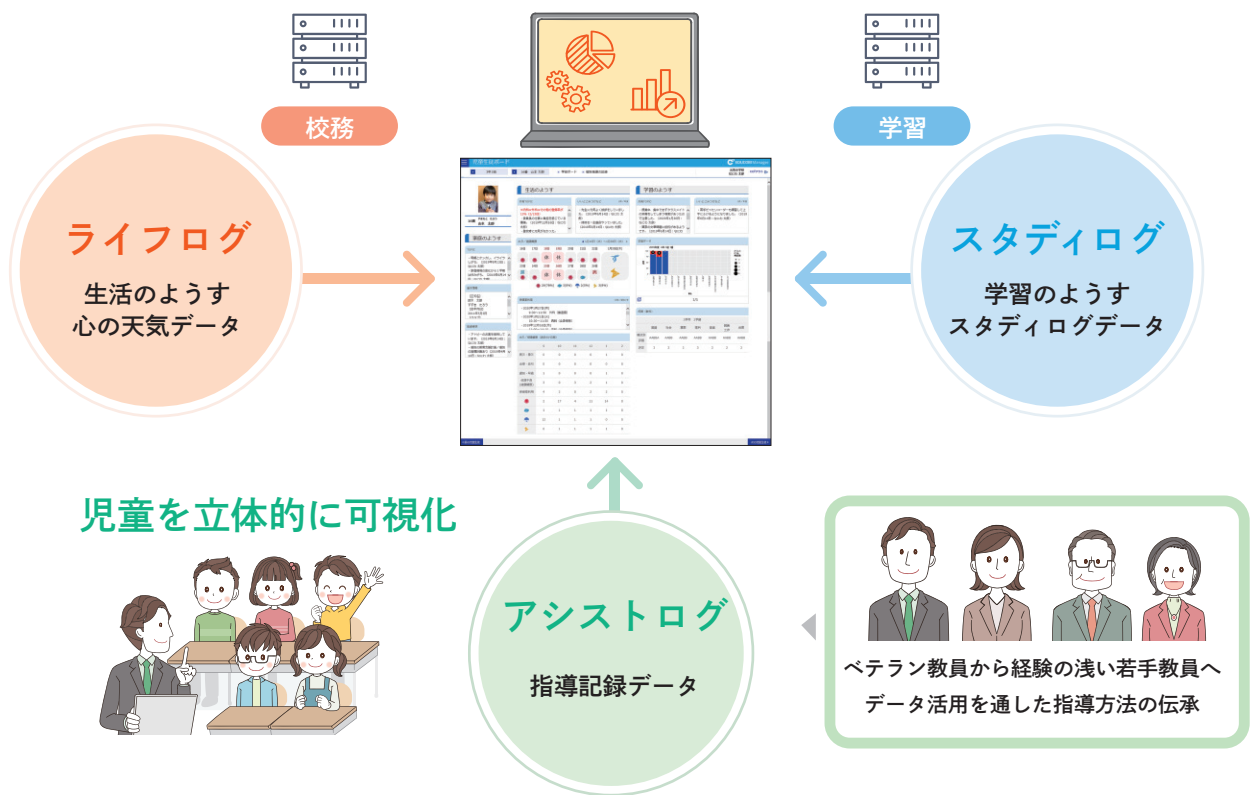
第4章 各実証校における実践と効果

実証校
滝川小学校

データ活用を通じ教員同士が指導方法を伝承
学校力を向上させる“チーム学校”の実現

大阪市立滝川小学校【大阪市北区】

1872年創立。在籍児童260名という小規模校ならではの特色を生かし、「一人一人が大切にされる学校づくり」を目指す。ICTを導入し、教職員間のさらなる連携を図りながら全児童を見守る体制づくりを整備している。



導入の概要	対象学年	》	1～6年の児童
	導入前の課題	》	教員が多忙感を抱えるなかで、多様な生活背景を抱える一人一人の子供像を明確化しにくい。管理職から学級の状況が見えづらく、情報の収集に手間と時間を要していた。
	取組の概要	》	日常所見機能を活用して指導方法を蓄積し、教員育成に役立てた。また、児童理解を深める様々なデータを学校全体で共有することで組織的な支援を可能にした。
	活用した連携データ	》	<ul style="list-style-type: none"> ●校務に関するデータ 出欠席情報、保健室利用記録、学籍情報、日常所見情報、成績評価情報 ●授業・学習に関するデータ 心の天気、デジタルドリル学習履歴

ICT導入により、今まで時間がかかっていた校務事務が効率的に行えるようになり、教職員に新たな時間が生まれ、児童と向き合う本来の業務にこれまで以上に注力できるようになりました。ダッシュボード(学級・児童生徒ボード)には、全学級、全児童のあらゆる情報が集約されています。これまでのように各担任が各学級を見る体制ではなく、「チーム学校」として、すべての教職員の目です

べての児童を見守ることができるようになり、問題が発生した際にも迅速で組織的な対応が可能となりました。

また、各教職員の個性、指導法、経験や知恵を相互共有できるのも大きなメリット。先輩教員の子供の見方が「見える化」されているため、教員同士で学びを得るなど、アシストログ的に活用することで、学校力・指導力向上に役立っており、教員同士の結束もさらに高まりました。

1章 次世代の学びで活用するシステム

2章 「次世代の学校を支援する」 「ダッシュボード」

3章 ICTを活用する学校のようす

4章 各実証校における実践と効果

5章 ICT活用のポイント

導入で得られた効果～実践者の声～

効果 1

「事案の抱え込み」を防止し、組織的な対応を可能に

これまで、事案が生じた際に教職員が一人で指導法に悩んでしまうこともありました。ICT導入により、一人一人の教職員が日々の出来事をオープンにすることで、学校全体が見える化。事案が起こった際には組織的な対応ができるようになり、見逃しの防止、個々の教員の不安の解消にもつながっています。システムを利用して互いのスキルや経験を共有しながら、教員同士が日々切磋琢磨して教育の質の向上を図っています。



導入当初は「デジタル化することで人間的ではなくなってしまうのではないか」という懸念がありましたが、教員と児童、教職員同士のコミュニケーションも広がり、より人間らしい教育ができているように思います。

校長 原 宏次 校長

効果 2

会議の大幅な時間短縮、ペーパーレス化が実現

これまでは会議の際、1つの議題に対していくつもの資料を用意したり、印刷する手間がありました。ICTを導入してからは、会議室の画面に資料を投影しながら会議を行うことができペーパーレス化が実現。また、ダッシュボードには様々な情報が集約されているので、ほとんどの会議は学級ボードや児童生徒ボードを開けば話が進みます。これまで2日かかっていた会議が今では1時間半ほどに短縮されたのは大きな成果です。

児童生徒ボードには日々の児童のようすが事細かに書かれています。教員同士でその情報を確認しながら会議を行うことで、進行がスムーズに。限られた時間の中で内容の濃い議論ができるようになりました。



CIO 榮 隆弘 先生

効果 3

日々蓄積されていく膨大な情報のおかげで、児童理解の質が向上

滝川小学校では、毎日16:30から30分間を「いいとこみつけタイム」と称し、全教職員が1日の振り返りや子供たちの学習状況、生活のようすを「いいとこみつけ」に記録する時間を設けています。学級・児童の情報が日々集積されていくので、子供たちの成長や変化に気づきやすく、児童理解の質が向上。保護者との懇談の際にも、データで示されたエビデンスをもとにした情報を提示できるので、信頼関係の構築にもつながっています。



「いいとこみつけ」のタグづけは、情報検索がしやすく、問題が起きた際にもすぐに状況を把握することができます。さらに学期末の評価の際にもいろいろな出来事をスムーズに思い出すことができ便利です。

教務主任 坂田 みずほ 先生

実証校
天王寺小学校
データ活用を通して、児童の自己指導力が芽生える『主体的・対話的な学級』の実現

大阪市立天王寺小学校【大阪市天王寺区】

145年の歴史があり、親子3代にわたっての卒業生も多い。地域に伝わるなにわ野菜「天王寺かぶら」の栽培活動を行うなど地域文化を大切にされた教育を実践。「心豊かで助け合うたくましい子」の教育目標の実現を目指す。

児童自身がデータを活用

友達へのいいとこみつけ

学級のヒートマップ、仕上げ結果グラフ (クラスの習熟度状況の把握)

学級の心の天気サマリ情報 (心の天気を快晴にしようプロジェクト活用)

導入の概要	対象学年	》	4～6年(高学年)の児童
	導入前の課題	》	他の児童と一緒に、児童が自ら学びを振り返ることで、苦手なことを克服させたい。
	取組の概要	》	『いいとこみつけ』『心の天気』『やるKey』などで得られた様々なデータを、児童自身が自ら活用することで、児童の自己指導力が芽生え、主体的・対話的な学級が実現できている。
	活用した連携データ	》	<ul style="list-style-type: none"> ●校務に関するデータ 学籍情報、日常所見情報 ●授業・学習に関するデータ 心の天気、デジタルドリル学習履歴

天 王寺小学校では、児童自身がデータを活用する取り組みを実践しています。たとえば、学級で「心の天気」のサマリ情報を共有し「心の天気を快晴にしようプロジェクト」を実施。常に晴れの子が雨や雷を入力した時には声を掛けたり、その子のためになることをしてあげることで、他人を思いやる気持ちの芽生えや、自発的な学

びの助長に。また、「やるKey」における学級の習熟状況も児童に開示することで、児童自身が学びを振り返るだけでなく、他の児童にも学習を促すなど、協働的な学びの機会へとつなげています。その結果、学級全体が元気になり、主体的・対話的な学級づくりが実現できています。

導入で得られた効果～実践者の声～

効果1

ICTのおかげで、より人間らしい教育が実現している

導入当初は「機械を入れることで人間的ではなくなってしまうのではないか」という懸念があったものの、実際に導入してみると、これまでキャッチしきれなかった子供たちの心の声を、データから読み取れるようになったり、教員と児童、教職員同士、保護者とのコミュニケーションが相乗的に広がるなど、より人間らしい教育が実現。学力の面でも高いレベルで毎年前年度を上回っており、子供たちの確かな成長を確認できています。



ただやみくもに ICT を使うことが良いのではなく、大切なのは「どう活用するか」。学校や学級の状況から活用の目的を定め、教員自身が使い方を工夫していくことが、ICT 活用における成功のポイントではないでしょうか。

校長 足立 敦彦 先生

効果2

アイデア次第で活用はどんどん幅が広がる

ICT 導入にあたり、はじめは不安を感じる学校や教職員は少なくありません。そこで天王寺小学校では、デジタルネイティブである子供たちと、一緒に楽しみながらデータを活用。子供たちに「心の天気」「いいとこみつけ」「やるKey」など様々なデータを学級にて開示し、児童同士が互いに切磋琢磨して成長できる仕組みを構築しました。このように、ICT はあくまでツールであり、アイデア次第で活用の幅は無限に広がります。

「いいとこみつけ」は、タグを付与することにより情報検索しやすく、学期末の評価の際にはいろいろな出来事をスムーズに思い出すことができます。また、問題が起きた際にもすぐに状況を把握でき、便利です。



CIO 巽 俊弘 先生

効果3

子供たちが積極的に学びに取り組むようになった

「がんばりコイン」の獲得、「トロフィー」の授与など、子供たちのやる気を高める様々な仕掛けがあるデジタルドリル「やるKey」。子供たちは「やるKey」での学習を非常に楽しんでおり、休み時間にも積極的に取り組んでいます。児童自身が目標を立ててクリアする「自己指導力」が育つだけでなく、できない子がいたら教えたり、「ここまで達成しよう」と互いに励まし合ったりするなど、学級全体の学習意欲が向上しています。



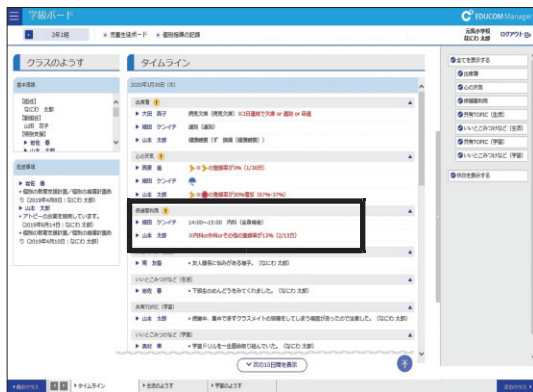
「やるKey」は、児童一人一人の理解度やつまづいた箇所を可視化できるのが便利。エビデンスとして残るので、授業設計や指導の判断材料として役立つだけでなく、保護者への説明においても説得力が高まります。

実証学年主任 山角 江美先生

実証校
阿倍野小学校
出欠席情報や保健室利用記録のデータからの気づき
児童の状況を多角的に分析

阿倍野小学校【大阪市阿倍野区】

1923年創立。「強いからだと豊かな心を持ち、よく考えてやりとげる子供を育てる」が教育目標。ICT活用事業モデル校としてICT機器などの先進的な教育環境を整えつつ、授業実践を中心にデータの有効な活用についての研究を進めている。



保健室利用記録における明確な理由が定まっていない「全身倦怠」の原因分析



担任や担任外の教員（管理職、養護教諭、同学年の異なる学級担任）が保健室利用記録を中心に生活に関わるデータを分析

導入の概要	対象学年	4～6年（高学年）の児童
	導入前の課題	明確な理由がなく保健室を利用する児童が多かった。その場合、養護日誌をもとに、来室状況、来室理由、出欠記録等を手集計するなどし、聞き取り等を通して原因分析していたが、非常に時間のかかることであった。
	取組の概要	出席情報や保健室利用記録、児童ボードへ集約された情報から児童の不調の訴えとなる原因を多角的に分析し、個別対応に活かした。
	活用した連携データ	<ul style="list-style-type: none"> ●校務に関するデータ 出欠席情報、健康観察情報、保健室利用記録、学籍情報、日常所見情報、成績評価情報 ●授業・学習に関するデータ デジタルドリル学習履歴、日常所見情報（Q-U結果）

明 確な理由がわからない「全身倦怠」で保健室に来る児童が多かった阿倍野小学校では、統合型校務支援システムの「保健室利用記録」のデータを活用して、不調の訴えを分析しました。まずは、システム上で「保健室の利用頻度」「全身倦怠による利用の回数」「曜日」などの条件でアラートが出る設定に。アラートが出た児童の利用時間帯と時間割を照合するとともに、「児童生徒ボード」か

ら、直近の学習状況や生活状況、家庭状況などを確認しました。その結果、友人とのトラブルや苦手な教科の授業、家庭状況の変化等、それぞれの不調の訴えにつながる原因が明確になってきました。該当の児童に対して、学級担任や養護教諭、関わりのある担任外の教員、管理職等から個別の対応や指導、声掛け等を行ったところ、「全身倦怠」による保健室利用が半数以下に激減しました。

導入で得られた効果～実践者の声～

効果1

校長としての判断や、関係諸機関への報告が迅速に行える

月に2回の児童理解のための会議は、すべてPCを使い、ペーパーレスで行っています。これまでは、あちらこちらのフォルダにある複数の資料を各自で参照しながら進めていましたが、現在は児童生徒ボードを開くだけですべての情報を確認できるので、会議の進行がスムーズに。顔写真も登録されているので、担任以外でもどの児童かがすぐにわかり、児童理解が深まります。また、情報が一元化されているので、関係諸機関からの問い合わせについても効率的に対応できます。



毎朝、各担任が出欠状況を入力すると、学校全体の数値がリアルタイムに集計されます。インフルエンザ流行時には感染状況がすぐわかるので、関係諸機関への報告や学級休業の判断が迅速に行えます。

校長 吉田 恵美子 先生

効果2

事案が起こった際に、対処すべきタイミングが明確にわかる

学期ごとに(年3回)児童の学習意欲や学級への満足度に関するQ-U(たのしい学校生活をおくるためのアンケート)を実施しています。アンケート結果は、マトリクスに個々の情報をプロットすることで可視化し、個々の回答状況や学級の様相がひと目でわかるようにしています。アンケートで気になる児童がいた場合、ダッシュボードの要配慮情報に登録。児童の学習・生活の情報とともに各担任と話し合いを行うなどして、指導方法の改善や個別の指導に役立てています。

これまで、ベテラン教員が経験や勘をもとに若手教員の育成を行っていましたが、明確な数値や分析結果に基づいた指導を行うとともに、目標も明確に立てられるようになり、若手の教員の成長が早くなりました。



教務主任 /CIO 角野 弘和 先生

効果3

日々の養護日誌を全教職員で共有。児童の不調とその原因に早く気づき対応できる

これまでと違い、ダッシュボードに養護日誌の情報がリアルタイムに反映されるので、全教職員が全児童の健康状態や保健室利用の状況等を確認でき、不調を訴える児童への対応もより適切にできるようになりました。また、反対に、各担任が出欠状況や健康観察の結果を入力すれば、養護教諭がすぐに確認できるため、保健室でのより迅速な対応が行えるようになりました。多様なデータが確認できるため、児童から受ける相談にも一歩踏み込んだ対応ができます。

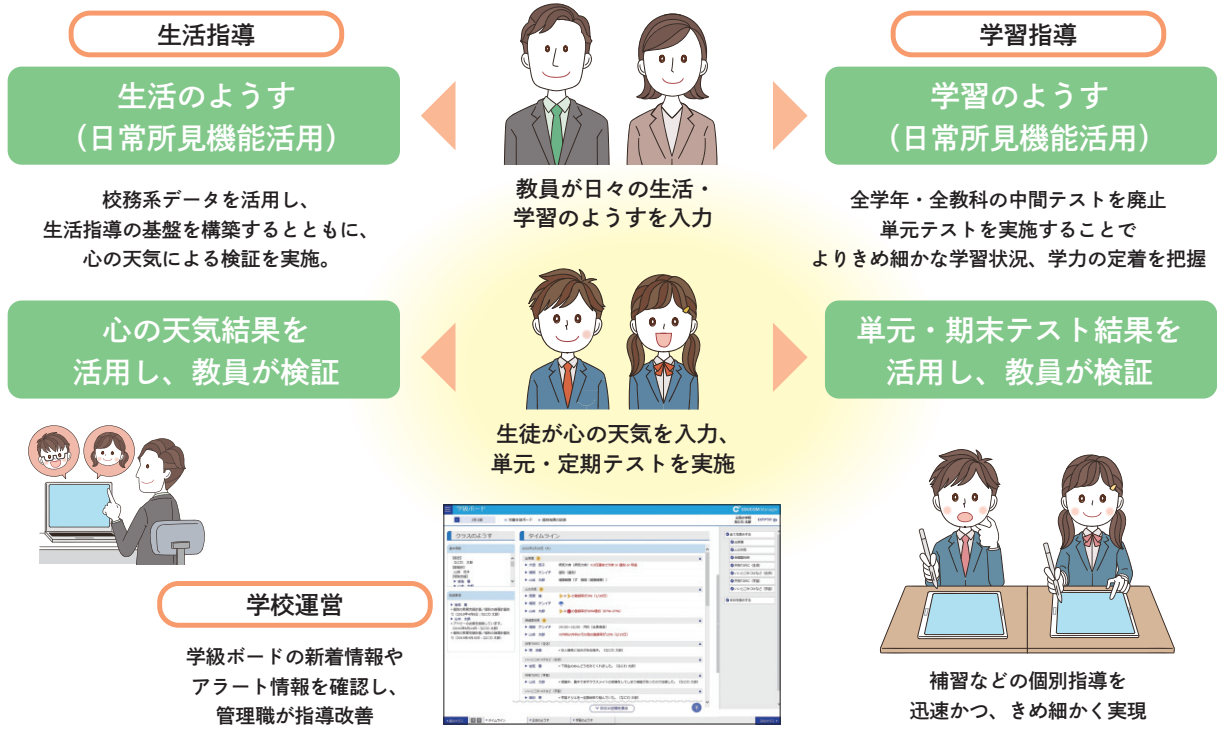


養護教諭が各担任と連携できるのは大きなメリット。毎朝、各学級の出欠状況、児童の健康状態がリアルタイムにわかるので、状況をすぐに把握でき、保健室での対応が迅速にできるようになりました。

養護教諭 村上海砂 先生

実証校
大和川中学校
ICT活用を通じた学習環境の整備と指導改善をすすめる『学校改革』の実現

大阪市立大和川中学校【大阪市住吉区】 昭和47年9月、三稜中学校の分校として設立。校訓「自学・友愛・自律」のもと、すべての生徒が安心・安全に学習できる教育を図り、自ら困難を乗り越え生き抜く力を育む学校づくりに、全教職員協力のもと進めている。



導入の概要	対象学年	1～3年生の生徒
	導入前の課題	以前は学校が荒れており、大半の教員が生活指導に多くの時間を割いていた。無気力な生徒が多く、学力の低下が目立っていた。
	取組の概要	学校を立て直すため、ICTを活用した取り組みを実施。 (1) 心の天気や日常所見情報を活用することで、生活指導の基盤を構築。 (2) 「リアテンド」による単元テスト実施し、きめ細かな学習状況の把握。個別指導へつなげ、学力の定着・向上を図る。 (3) 学級・児童生徒ボードを管理職が日々確認し、指導力の改善、学校運営に活用。
	活用した連携データ	●校務に関するデータ 出欠席情報、保健室利用記録、学籍情報、日常所見情報、成績評定情報 ●授業・学習に関するデータ 心の天気、単元・定期テスト結果

以前は学校が荒れており、秩序を保つことが困難な状況がありました。学校の立て直しを図るため、「秩序構築」と「学力向上」の2つの目標を掲げ、ICTを活用して段階的な取り組みを実施。職員朝礼での情報連絡を簡略化し、必要な連絡はすべてシステム上で行う仕組みに。生徒と触れ合う時間を増やすとともに「集団生活のルールを守ること」「挨拶の励行」「時間厳守」など社会生活の基本を徹底的に浸透させました。また「心の天気」や「日常所見」の情

報を活用し、検証しながら生徒との支援や対話を行い、指導改善へとつなげました。

学習面では、中間テストを廃止して、「リアテンド」を活用した単元・定期テストに注力。単元ごとにきめ細かに学習状況を把握することにより、個別指導へつなげ、学力を定着・向上させていきました。これらの取り組みの結果、生徒の意識が大きく変化し、安心・安全かつ意欲的に学びに向かう生徒集団へと学校改革が進みました。

導入で得られた効果～実践者の声～

効果1

先を見越した指導ができるようになった

大和川中学校には若手教員が多く、教員歴10年未満が78%在籍。教員育成においてもICTを活用しています。これまでは経験や勘に基づいた指導が主流で、ある程度のスキルを獲得するまでには長い期間を要していましたが、ICT導入後はデータを活用することにより数値に基づいた指導ができ、経験が浅い教員でも工夫次第で指導の質を高めていくことが可能に。また、若手教員がベテランの指導のデータを見て参考にしたり、若手教員からの積極的な相談や提案も多くなりました。



蓄積されたデータを分析することで、なにかトラブルが起こる前に対策ができたり、学習データをもとに不足している点を洗い出すなど、後追いの対処ではなく、“先を見越した指導”ができるようになりました。

校長 福島 清文 先生

効果2

单元ごとに学習状況を把握できるようになった

「リアテンド」を導入し、テストの採点時間が大幅に短縮されました。中間テストを廃止し、単元テストを実施することで、よりきめ細やかに学習の状況を見取ることができるようになりました。デジタル採点することで、観点別得点、合計点が自動集計され、設問ごとの正答率も瞬時に把握することができます。習熟の様子を的確に把握し、授業改善につなげたり、補充学習に取り組んだりしています。

串刺し採点機能は本当に便利。文章題などは採点するうちに基準がずれてしまうことがありますが、リアテンドは学級の解答を一覧で確認しながら採点できるので、採点基準を確認しながらスムーズに採点できます。



小谷 拓 先生

効果3

生活データの些細な変化で生徒の不安に気づけるようになった

ある生徒が最近、上履きのかかとを踏んでいたことが気になり「心の天気」や学習状況などを確認したところ、不安定な状況が見取れたため、担任と相談し声掛けを実施。すると、学級代表のプレッシャーに加え、部活と勉強がうまく両立できていないなどの不安が原因であったことがわかりました。該当の生徒には部活と勉強に集中できる環境づくりを促し、生活面・学習面ともに改善を図ることができました。



生徒の気持ちや状況を可視化できるのは教員にとって非常にありがたいことです。様々な情報を紐づけ、分析しながら、子供のケアをすることができ、生徒や保護者に対しても建設的な提案ができます。

西口 和 先生

実証校
旭陽中学校
教員が客観的なデータと生徒の対話から見取ることによる『安心・安全な学校』の実現

大阪市立旭陽中学校【大阪市旭区】

昭和22年旭第一中学校として創立。570名が在籍する大規模校。「人権尊重の教育を基盤とし、豊かな人権感覚と自己実現の力をはぐくむ教育活動を推進する」を教育目標に掲げ、子供たちが未来を切り拓く力、豊かな心の育成に取り組んでいる。

1章 次世代の学びで活用するシステム

2章 「ダッシュボード」による次世代の学校を支援する

3章 ICTを活用する学校の様子

4章 各実証校における実践と効果

5章 ICT活用のポイント



出欠簿

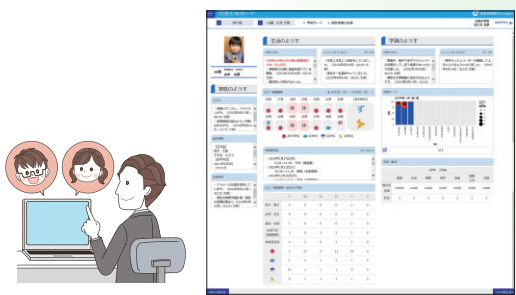
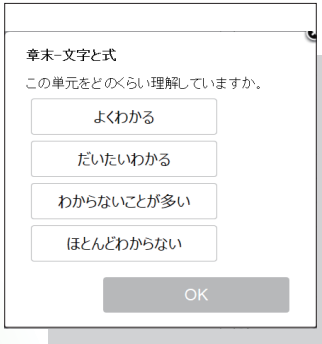


心の天気結果



保健室利用

理解度アンケート



生徒との対話からの見取り



設問別正答率



導入の概要	対象学年	》	1～3年生の生徒
	導入前の課題	》	学校外での問題など様々な悩みを抱えている生徒が多かった。
	取組の概要	》	・新校長の着任時における各学級・生徒の状況の早期把握。 ・「学級ボード」「児童生徒ボード」の情報から生徒の発するSOSのシグナルや問題の早期発見。各教員が気づきを得て、声掛けや指導につなげる。
	活用した連携データ	》	●校務に関するデータ 出欠席情報、保健室利用記録、学籍情報、日常所見情報、成績評定情報 ●授業・学習に関するデータ 心の天気、定期・単元テスト結果、理解度アンケート結果

生徒 来、新校長の着任時においては、引き継ぎ資料の読み込みに加え、生徒情報の収集には膨大な量の資料を書庫から取り出して確認する必要性がありました。個人情報なので、場合によっては限られた場所でしか閲覧することができず、手間がかかることもありました。旭陽中学校では、新校長着任にあたり、ダッシュボードの情報を学校の状況の早期把握に活用。生徒の顔と名前、生活・学習の背景、家庭状況や課題を確認するとともに、気になる学級、生徒に

ついて事前にインプットした状態で新学期をスタート。円滑な学校運営、生徒、教員とのコミュニケーションに活かしました。また、「心の天気」入力時に必ず生徒とコミュニケーションを図るとともに、「生徒ボード」のアラートや新着表示などの機能を駆使して、生徒が発するSOSのシグナルの見落としを防止。全教員が協力して問題の早期発見、迅速な対応に努めています。

導入で得られた効果～実践者の声～

効果 1

時短勤務で朝礼に出られなくても状況をすぐに把握できる

時短勤務や育休から復帰する教職員が増えており、勤務時間帯によっては職員朝礼に出られないケースも。その場合、以前は他の教職員に確認するなどしなければなりませんでした。現在はダッシュボードを立ち上げれば、打ち合わせの内容や学校全体の状況が手に取るようにわかります。打ち合わせに出られなかった教職員でも状況を把握した上で、不安を感じることなく、自身の業務に取りかかることができます。



ダッシュボードは教職員の情報共有のための強い味方。時短勤務などの働き方でもハンディを感じることなく、すべての教員が同じようにパフォーマンスを発揮できるツールだと感じています。

校長 辰巳 千佳子 先生

効果 2

SOS のシグナルの早期発見、問題への迅速な対応ができる

中学生は思春期にあたり心の不安定な時期。表情は笑っていても、心の中は様々な感情が入り乱れていることもあります。旭陽中学校では、毎朝、教員がタブレットを持ち、生徒とコミュニケーションをとりながら「心の天気」を入力してもらう方式に。天気のマークはもちろん、生徒との対話や表情を踏まえて生徒のようすを観察し、SOS のシグナルがあった場合には、教員同士が協力して迅速な対応をとるようにしています。

「心の天気」で「雷」がつづき、欠席が増えていた生徒に声掛けしたところ、トラブルを抱えていたため、保護者と連携し登校を促しました。「心の天気」は心のバロメータとして欠かせないツールです。



教務主任 /CIO 日下 貴雅 先生

効果 3

学習データの気づきから授業改善を図ることができる

定期テストと単元テストの結果を条件付けし「前回分との差が大きい上位および下位 10% のグループ」および「年間の線形近似の傾きが大きい上位と下位のグループ 10%」をアラート表示。その結果により習熟度別学級を編成。生徒の実態に即した授業や、課題に応じた授業を実施。課題に応じた補充学習などを行い、学習の定着を図ることができました。また、理解度アンケートや得点力の推移のデータも活かし、つまずきの早期発見につなげています。



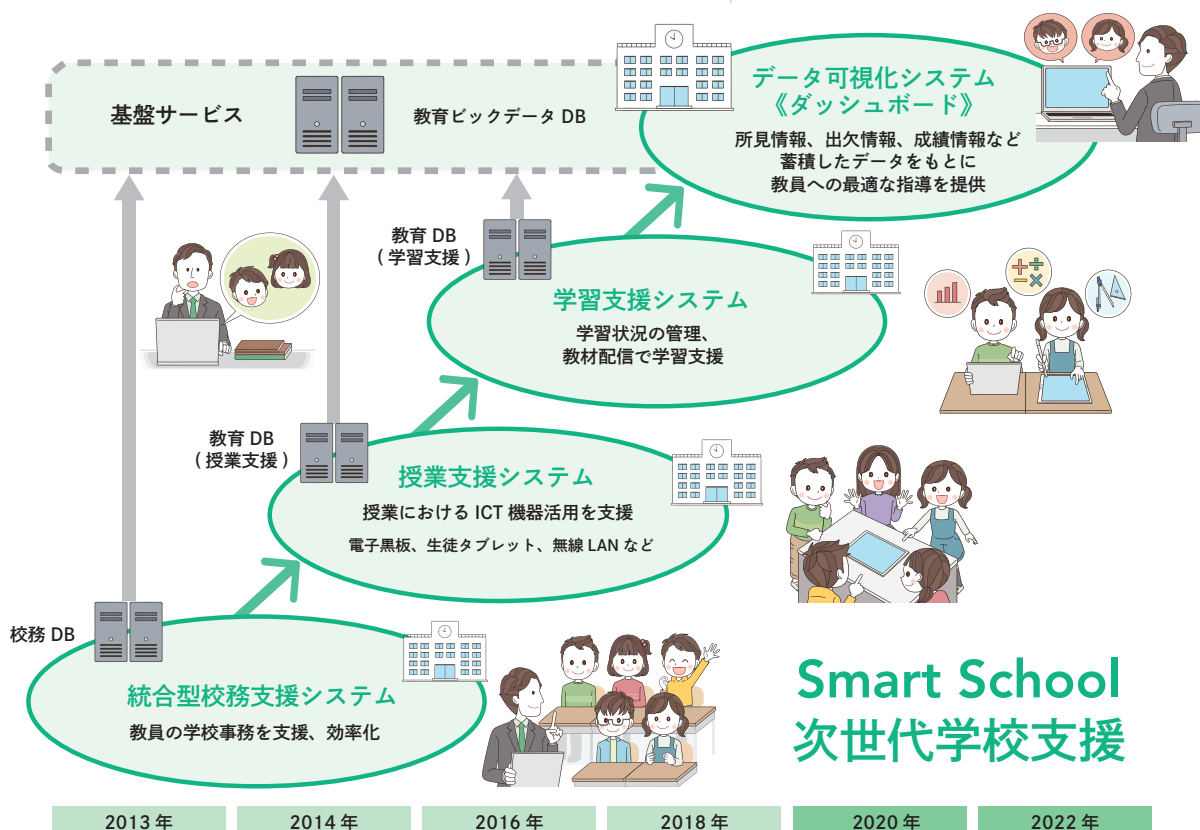
「リアテンドント」は効率的に採点できるので、テスト実施後すぐに返すことができます。データに基づいてつまずきや苦手な箇所を洗い出し、重点的に説明できるので、生徒の理解度が向上しました。

浦辻 宗一郎 先生

導入におけるポイント

スマートスクール実現に向けた教育情報化

効率的なシステム増強と、教員のICTリテラシーを勘案した、段階的な展開と教育情報化を施行しています。



ICTデータを活用する学校像
導入における3つのSTEP

1st STEP	<p>統合型校務支援システム (SKIP) の活用を広げよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教職員の情報共有、会議体における業務効率化、働き方改革を意識しよう。 ・教務必携や各種記録簿などの内容をアナログからデジタルに変換してみよう。
2nd STEP	<p>授業・学習支援システムを活用しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業や朝の会など、教室でICTを活用し、子供たちからのデータを蓄積してみよう。 ・データから声掛けのきっかけを掴んで、指導支援につなげよう。
3rd STEP	<p>データ可視化システム《ダッシュボード》を学校全体で活用しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集約化されたデータから多面的に子供を理解しよう。 ・新着やアラート情報から日々の気づきを磨こう。

1章 次世代の学びで活用するシステム

2章 「ダッシュボード」次世代の学校を支援する

3章 ICTを活用する学校のようす

4章 各実証校における実践と効果

5章 ICT活用のポイント

活用の STEP

1st STEP

導入のための取り組み

- 会議室機能や掲示板機能を活用し、職員朝会を簡略化、もしくはなくせるかを検討してみよう。
- いいとこみつけ（日常所見）機能をタグ付け設定も含めて活用し、様々な子供たちのようすを記録しよう。
- 教室で出欠簿・健康観察機能を活用してみよう。

なんのため？

- 朝は教室で子供たちと1日をスタートしよう。
- 通知表や指導要録への活用を意識しよう。
- 管理職や養護教諭とリアルタイムに情報を共有しよう。

2nd STEP

導入のための取り組み

- 授業でICTを活用し、子供たちの学習履歴やアンケート結果、作品などのデータを蓄積しよう。
- 朝の会で子供たちの心の天気を登録してみよう。

なんのため？

- 教員間でデータを分析し、評価と指導に活用しよう。
- 声掛けのきっかけを掴み、子供たちの日々の心の変化に気づこう。

3rd STEP

導入のための取り組み

- 児童生徒理解研修会、特別支援教育研修会、生活指導部会などの会議体において、児童生徒ボードを活用しよう。
- 学級ボードの到着やアラートを活用し、子供たちへの声掛けや個に応じた指導へ活用しよう。
- 全教職員で活用しグッドプラクティスを積み上げよう。

なんのため？

- 子供たちを多面的に理解し、個に応じた指導へつなげよう。
- 早期発見、早期対応の安心・安全な学校づくりを目指そう。
- 教師力の向上をはかり一人一人の子供を大切にする「チーム学校」を目指そう。

教育の情報化

おわりに

有識者の声



立命館大学大学院 教職研究科

菱田 準子 教授

ダッシュボードはチーム学校を実現するためにも是非積極的に活用してください。学校全体で情報が集約化され、リアルタイムに子供一人一人の情報を共有できることで、個に応じた指導や声掛けを教員が共有できるようになります。そして、それぞれの教員の役割を明確にし、児童生徒の支援に全員で取り組むことが可能になれば、世代を超えて繋がり合う教職員組織が形成されるでしょう。

ダッシュボードはその一つのキーステーションです。ダッシュボードの具体的な活用は各学校の主体的な創造力・発想力の見せどころです。子供たちはもとより、保護者や教職員の幸福づくりが推進されることを大いに期待しています。



鳴門教育大学大学院 遠隔教育プログラム推進室長

藤村 裕一 准教授

大阪市では、我が国で初めてスタディログ、ライフログ、アシストログの3種の教育情報が蓄積され、ダッシュボードの形で可視化・集約されることで、「次世代学校支援」という言葉が実現できている。エビデンスベースなスクールマネジメントが実現できており、個に応じた指導、トラブル対処など、成功事例が数々生まれてきていることが非常に素晴らしい。大阪市には、これからも日本のトップランナー、モデルであり続け、すべての学校で教育改善が行われるようにしていただきたい。



大阪教育大学大学院 連合教職実践研究科

寺嶋 浩介 准教授

大阪市では、各実証校においてボトムアップで活用を進め、多くの成功事例が生まれている。教員の知識と経験に加え、校務系や学習系などの多くのデータを活用し、子供の多面的な理解に役立て、声掛けや指導に活用しようとしている。

教員誰もがデータを活用することができるようになり、学校全体で情報を共有、データの見方を議論するなどすれば、若手教員が増加する中で、子供への理解を深めることにつながり、非常に有意義なことである。エビデンスデータの活用について、このような取組みを事例化したり、ガイドラインとして整理することで、是非、大阪市の教育をより充実させていってほしい。

本実証事業では、立命館大学、鳴門教育大学、大阪教育大学より3名の先生方にご指導いただきました。また、実証校小学校3校、中学校2校の校長先生はじめ教職員の方々には、学校教育におけるニーズや課題を基に、次世代学校支援システムの開発と活用、実践に取り組んでいただきました。大変大きな成果を得ることができましたこと、ここに心より感謝申し上げます。あわせて、システム開発に携わっていただいた事業者の皆さま、ご協力誠にありがとうございました。

大阪市の小中学校でより多くの先生方に有効活用いただけるよう、この成果をガイドブックにまとめましたのでお届けします。

次世代学校支援事業事務局

▶次世代学校支援モデル構築事業実証校

大阪市立滝川小学校

大阪市立天王寺小学校

大阪市立阿倍野小学校

大阪市立大和川中学校

大阪市立旭陽中学校

▶次世代学校支援事業委託事業者

日本電気株式会社

株式会社 EDUCOM

凸版印刷株式会社

大日本印刷株式会社

次世代学校支援事業ガイドブック

令和2年3月2日発行

編集 大阪市教育委員会事務局 学校経営管理センター

発行 大阪市教育委員会事務局

〒557-0014

大阪市西成区天下茶屋1-16-5





大阪市次世代学校支援事業ガイドブック

大阪市教育委員会